

第 20 期生 GMC 参加報告

第 20 期生 新田 奈央

◆GMC とは...？

GMC とは、正式名称を“Global Marketing Conference”といい、理論と実践の進捗は、世界中の消費者やビジネスに影響を及ぼすグローバルなマーケティングとマネジメントの重要な側面であり続ける、という理念の元で運営されています。2023 年は、“Marketing & Management Transformation in the Challenging Digital Environment”をテーマに、韓国のソウルで開催されました。

◆執筆論文の概要

第 20 期の英語論文のタイトルは、“The Comparison among Three Kinds of Visual Perspectives of Service Experience Vlogs”です。既存研究によると、一人称視点の静止画は、内部評価思考を生起させ、促進焦点傾向の消費者の製品評価を高める一方、三人称視点の静止画は、外部評価思考を生起させ、予防焦点傾向の消費者の製品評価を高めるといわれています。しかし、動画はこの議論の対象となっていませんでした。そこで、本論は、研究対象を動画に拡張し、出演者の顔出しの有無を追加的に考慮したうえで、いかなる動画が内部（／外部）評価思考を生起させやすいのか、そして、いかなる動画が促進（／予防）焦点傾向の消費者の製品評価を高めるか探究することを試みました。

◆発表後記

初めての海外学会に参加すべく、私たちは、深夜に羽田空港を出発し、早朝の仁川空港に降り立ちました。私たちのプレゼンは、4 日間開催される学会の 3 日目だったため、空港で小休憩をとった後、私たちは早速韓国観光を開始しました。...とは言ったものの、何かと楽観的な私たちは、ノープランで韓国に乗り込んでいたため、私たちの韓国観光は、空港で借りた Wi-Fi を接続し、最初の目的地を探るところから始まりました（笑）そして、みんなであれこれと検索した結果、最初の目的地は、梨紗発案のロッテワールドに決まりました。アトラクションに乗ったり、園内を散策したりと、日本のテーマパークとはまた違った雰囲気を楽しみました。念願のムーンボートに乗ったのに、運転センスがなさず



ロッテワールドで撮影した写真

ぎてスタッフさんに速攻運転手交代を命じられた梨紗は、見ていて本当に面白かったです(笑) ロッテワールドを出て、明洞のホテルに移動した後は、みんなで屋台飯を食べ歩き、初日から韓国を満喫する1日となりました。

翌日は、男女に分かれてそれぞれ観光を楽しみました。女子チームは、梨泰院でショッピングとカフェ巡りをしました。カフェは3軒ほど巡ったのですが、どのお店も外装・内装が本当にオシャレで、カフェ大国の凄さに感動しました。男子チームの方は、後から聞いた話によると、マッサージを体験したり、歴史的建造物を見学したりしていたそうです。そして、夜には、小野先生と一緒に学会主催のディナーに参加しました。ナイフやフォーク、様々な大きさ・形のグラスがずらりと並べられたテーブルに案内され、非日常的な空間に緊張しましたが、終始和やかな雰囲気だったので、ファッションショーや弦楽合奏とともに、コース料理を楽しむことができました。海外の著名な学者の方とお話する機会もあり、非常に貴重な経験をさせていただきました。



学会主催のディナーの様子
(左から、有田、中村、國武、二宮)

韓国に着いて3日目、ついにプレゼン当日の朝を迎えました。資料の最終確認やプレゼンの予行練習など、慌ただしく準備を終えた私たちは、会場であるロッテホテルに向かいました。プレゼン会場には、たくさんの聴衆が集まっていて、セッションが始まるとプレゼンターと聴衆との間で活発な議論が交わされました。その様子を見て緊張が増していくなか、ついに自分たちの順番がまわってきました。自分たちが



プレゼン後の集合写真

長い間向き合ってきた研究が、海外でどう評価されるか不安な気持ちもありましたが、練習の成果を発揮し、無事にプレゼンを終えることができました。プレゼン後には、素晴らしい研究だと様々な方からお褒めの言葉をいただき、今までの苦労が報われたと感じるとともに、大きな達成感を得ることができました。メインイベントを終えた私たちは、小野先生と街中を観光したり、お土産目当てにショッピングをしたりと、残りの滞在時間も韓国を満喫し、帰国の途に就きました。

3年生の6月から三田論執筆活動が始まり、その過程には辛いことも多くありましたが、約1年後には、英語論文としてGMCのような世界最大規模の海外学会での発表機会を得ることができました。このような貴重な経験ができたのは、多くの方々にご助力いただいたからに他なりません。ここまで支えてくださった皆様に、心より感謝の意を表したいと思います。とりわけ、昼夜を問わず熱心にご指導して下さった小野先生、そして、仮説提唱から実験計画、論文執筆に至るまで何度も相談に乗って下さった大学院生の方々には、大変お世話になりました。これまでの活動を通して培った経験を糧にして、今後も精進して参ります。本当にありがとうございました。